

小田急線の少年に出会う

——大人と子供との出会いがこんなにも楽しいなんて（春は近い）

今日（二三日金曜日）は朝八時から東海大学湘南キャンパスへ。小田急線の成城学園前から西へ。成城学園前から新宿方面には何度も行くが、西へ行くのは今回が初めて。成城学園前から東海大学前までは約五〇分かかる。

初めての風景に新鮮さを感じながら、この車中で面白いことがあった。書かずにはいられない（苦笑）。和光大学を越えたあたりで、小学校四年生くらいの男の子が、私の斜め左前の席に座った。登校途中かどうかはわからない。時間的には少し遅い。小学生らしい男の子は車両の中ではその子だけだった。しかも私服。私学はもう春休みか。

男性の手元を真剣に見つめる少年

座った途端その子は、私の左隣の男性の手元をまじまじと見つめている。あまりにもまじまじと見

ていたので、思わず私は私の隣のその男性を見てしまった。たぶん男性がゲーム機か何かを持ってゲームでもしているのだろう、と思いつながら。するとその男性は、腕を上げて携帯電話でメールを打っているだけ。特に変わったふうでもない。

私には少年が何を見ているのかさっぱりわからなかった。しかしその目は明らかに異常なくらいにぱっちり男性の手元を見ている。それだけはわかった。

何駅かは忘れたが、しばらくするとその少年は立ち上がり電車を降りようとしていた。左隣の男性にその立ち上がるチャンス逃さずにぐっと近寄り、まだその男性の手元を見ていた。今度は私の手元にも目をやり、そして私の右隣の男性にも、まなざしは車内を歩くに連れて移動する。しかも目つき真剣さは変わらない。次々と視線が左の手元に移動する。

そのとき、私ははたと気づいた。「そうか、この少年は学校を遅刻して、いま何時か知りたいのか」と。少年の目当ては腕時計だったのだ。

そのとき、少年は出ようとしてドアのポールのそばに立っていたが、まだなお私（たち）の手元を恋しそうに見ていたので、私はその理由がわかった感激から（ちょっと大げさか）左腕をあげて彼に私の時計を見るように手招きして呼び込んだ。「はい」と手の甲を、私の時計を指さしながら差し出した。そうすると降りようとしていた少年は、小躍りして私のそばに戻ってきて、「グランドセイコーだ。すごい！機械式？」と大きな声で叫んだ。

あちゃー。私は、驚きと恥ずかしさで一瞬赤面した（こんなに恥ずかしい思いをしたのは久しぶり！）。

そうか、この少年は腕時計ファンだったのだ。ということは、私が腕を差し出したことは、私のイヤミな自慢？と思わず赤面したのだが、しかしそういう自慢の（大人の）反省をかき消すくらいに少年の顔には、満面の笑みが浮かんでいた。

私には、その顔が忘れられない。私もその笑顔につられて「僕のはクオーツのグラントセイコーだけど三年間で四秒しか狂ってないよ」と思わず普通にしゃべってしまった（たぶん周りの人には聞こえていたと思う）。「グラントセイコー、やっぱりすごい」と少年が言葉を継いだときには出ようとしていたドアの一つ隣のドアの出口にさしかかっていた。

ホームからの電車が動き始めた窓越しに、少年は私の方を見やりながら、「バイバイ」と言いたげに手を振っていた。この間「グラントセイコーだ」と言ってから三、四秒の出来事。狐につままれ、というのはこういういったことか。

腕時計少年の純粹さに乾杯！

周りの大人たちは、何も聞いていないかのように静まり返っていたし、身動き一つしない。私の方を見ようとしめない。まるで何事もなかったかのような電車の普段の車中に戻っていた。私はなぜか、妙に恥ずかしくなかった。いったい、この数分間は何だったのだ。私はあの少年の顔とまなざしがいまでも忘れられない（いまは夜中の一時、なぜか愛媛県松山市のホテル東急インにいる）。

あの少年は、グラントセイコーにとどまらず、また車中であろうがなかろうが、町中を歩くときは、いつも腕の袖口のわずかなすきまから垣間見える腕時計をのぞき込んでいるのだ。そりゃあ、絶対に楽しいに違いない。というか、そのわずかな隙間から時計を同定するのもまたなんとも楽しそうだ。

「三年間で四秒しか狂ってないよ」なんていう超自慢をさらっと言わせてもらえた少年の純粹さに乾杯！三年前に一二回分割払いで無理して買った甲斐があったというもの。この少年に出会うために私はこの時計を買ったのか。京王線にはあんな少年はいないかもしれない（笑）。きつといない。

週末の食卓で、少年は、喜々として「今日、小田急線の電車で僕にグラントセイコー、見せてくれたおじさんがいたんだよ、すごいでしょ。かつこよかったよ、グラントセイコー」なんて言っていたのだろうか。お母さんは、その言葉をどんなふうに返したのだろうか。「よかったわねえ」と優しく返してくれたのだろうか。少年が育つのはそんな会話の中でしかない。そう思うとなんだか胸が熱くなってきた。

いきものがかりは、「さくらひらひら舞い降りて落ちて……小田急線の窓に今年もさくらが映る君の声がこの胸に聞こえてくるよ……」と昨年の紅白歌合戦で歌ったが、私にとっての「小田急線の窓」には、この腕時計少年の純粹なまなざしだけが映っている。同じ「小田急線」でも西に向かう春近し「小田急線」だからこそその出来事だったのかもしれない。きつとそうだと思う。

（初出・二〇〇九年三月一四日）

予備校営業が突然家にやってきた——リビングの家族の顛末

今日（三月七日金曜日）も一日が一〇分くらいの忙しい一日だった（二〇分というのは誇張でも何でもない）。朝六時半に朝食をとったまま、一日中食事もせず、二二時二〇分くらいに学校を出た。

その間、会議が三つ。レポートが一つ。学園の広告原稿が三つ。日経NET取材記事の校正が一件。麗澤大学教授一行との二時間の商談。武蔵大学教授一行の二時間の契約話が一件。オリコとの電子決済の契約話に一時間。コンビニ決済の業者との商談が一件一時間。来期カリキュラムとそのパンフレット作成の打ち合わせ。あつという間に二二時。もうこの時間になると目が見えなくなり始める。ところがこれだけ目がくぼんでパンダみたいになっているのに、それに食事も昼夜抜いているのに、お腹だけはくぼまない、痩せない。どうということだ。

塾や予備校を見極める二つの質問

やっと自宅に辿り着いたと思ったら（二二時五〇分）、今度は来客中。息子と家内が対応している。

「誰？」と家内に聞いたら、予備校の「営業の方」らしい。山崎さんという人。個人指導中心の予備校とのこと。全国で三〇校以上ある予備校らしい。組織の母体は都内にたくさん専門学校を有している学校法人。私もよく知っている。早速、息子の隣に座って、話を聞くことにした。

「太郎君のお父さんですか？ お会いしたかったです」と挨拶された。

私はこういった営業と営業の電話（要するに予備校評価）には、必ず二つの質問をすることにしていく。一つは「東大に現役で何人入れたの？」（息子を東大に入れるかどうかは別にして）、もう一つは「先生はどんな人がいるの？」である。

私が「東大」にこだわるのは、東大の数学や歴史の試験は暗記や知識だけではまったく歯が立たない問題が出るからだ。よくもまあこんな問題が解けるね、といった。考えさせる。問題が出る。だから、そんな東大問題に「対策」を立てられる教員は、そういない。

それにしても、「東大」の卒業生には大した奴がない。一説によれば、そんな優秀な問題を解いた学生たちも、難しいけれど平板な公務員試験（官僚になるための上級公務員試験）の準備でふたたびダメになるかららしい。

「ところで『東大』現役入学は何人？」

「一五六人です」

「全国で？」

「そうです」